

私は今、日本の研究所でリサーチフェローという職務を担っています。

女性管理職が語る

答えより「気づき」導く質問

長年培った消費者理解のノウハウと製品開発における技術的な知識とを組み合わせ、日本はもちろぬグローバル全体の研究開発職員のスキルアップに貢献することが重要な役割のひとつです。

若い頃から新たなものを創造する技術職ならではの魅力に取りつかれ研究開発のスペシャリスト職を究めたいと考えていました。入社17年目に管理職レベルへ昇進する際に技術専門職を選び、2012年に日本人で3人

目、日本人女性で初めてのこの立場に就きました。現在、世界中の若手社員や中堅社員のテクニカルアドバイザーまたはキャリアアメンターとして、10人ほどに定期的な個別オンライン面談をしています。後輩たちが私の経験やスキルを上手に利用し、成長する姿を見るのは本当にうれしいです。

P & G 研究開発本部
リサーチフェロー

松崎 薫氏



まつざき・かおる 1989年入社。研究開発本部で日本やアジアのヘアケア製品や化粧品の開発を担当。12年、日本人女性で初のリサーチフェローに。2児（大学生と高校生）の母。

答えに早くたどりつく

ためではなく、新たな挑戦ができるよう、気づきを導く。この「よい質問」が実に難しく、正しい現状把握と仮説構築につながり、有用な検証実験を促すには、どう問いかければよいか、いつも心を砕いています。

長年働く中で家庭との両立のために働き方を大きく見直す必要に迫られたこともあり。第

2子出産後、同居していた実父や叔母の介護にも直面しました。日々新たな課題が突きつけられ、正解も終わりも見えない介護生活の中で、いかに精神面での安定を保つかが最大の懸案でした。

共に介護を担った実母が「家族で介護するのが当然」という信念だったので、お互いの意見を尊重しながら価値観の違いに折り合いをつけ、介護する側も受ける側も無理なく生活が続けられる環境を維持することに時間

と労力を費やしました。その時に役立ったのが、仕事で培った情報収集力やコミュニケーション力、問題解決能力です。

育児や介護などの両方に悩む後輩によく話すのですが、私はプライベ

に悩む後輩によく話すのですが、私はプライベートで苦しい時こそ、仕事を続けたほうがよいと考えています。外の世界とのつながりを維持することで自分の陥った状況を客観的に捉えることができ、精神面での強さにつながると思います。

P & Gには個人を尊重する考えが基本にあります。一時的にワークライフバランスを見直す必要

がある時も自分に合った柔軟な働き方を選択できる環境に大いに助けられました。育児、介護の両立は大変でしたが、仕事を続けて本当によかったと実感します。

様々な経験を重ねる中で、今までは全く関係ないように思えた別々の情報がつながり、何かが生まれる瞬間があります。年を追うごとに頻度が高くなる、ぞくぞくするこの体験はキャリアを重ねてきたからこそのご褒美だと思っています。今、子供たちにお母さん、めっちゃ仕事が楽しそう」とよく言われます。

が、私の時とは時代も消費者も変わりました。そのアイデアがなぜ新たな機会を生むのか、彼らが

うに心がけています。自分の経験からつい「それをしても無駄だった」などと言いつつになります

012年に日本人で3人

機会を生むのか、彼らが

たこともあり。第

必要

環境を維持する

う」とよく言われます。